

人形の舞

作…いちのみや

登場人物（男…女…）

- ・ 依頼者 人形の修理を依頼しに、奇妙な店を訪れた女性。
- ・ 男 腹話術師
- ・ 老婆 無表情・無口
- ・ 娘 老婆の娘で、代
- ・ 孫 中学生 老婆の娘の娘。西洋人形のような顔立ち・服装をしている
- ・ 人形 人間そっくりの女性の人形。
- ・ 女 山道でガス欠。困って店を訪ねる
- ・ 警察 ある事件を追う男性刑事。老婆が怪しいと踏んでいる。

舞台は古びた店。

人形があらゆるところに置かれてある。

西洋人形・日本人形、種類を問わず乱雑に置かれている様子は不気味
上手には玄関。そのそばに、丸い机と二つの椅子。

さらに、その少し奥に別の部屋に通じる扉（通路または階段でも可）

下手は奥の部屋に通じる。

下手側に、カウンター。そこにも人形が散らばっている。

カウンターの近くまたは側には、棚がある。

開幕前から娘が入りしている。

出入りしながら、人形の位置を変えたり、机を拭いたりなどしている。慌ただしげだ。

娘が一旦完全にはけた後、扉を開いて入ってくる依頼者。

依頼者の手には、ひな人形がある。

カウンターに老婆が座って寝ているが、お互い気がつかない。

依頼者 すみませーん

依頼者 あのー、どなたかいませんか

椅子に座ってある大きな人間の人形を見て、

依頼者 うわ

人間の人形をのぞきこむ
不気味そうに震えた声で

依頼者 すみませーん。だれかー

老婆 小さい声で

老婆 なんだい

依頼者、人形に耳を傾ける

依頼者 何か言った？

老婆 なんだい

依頼者、依然、人形のそばに耳を傾ける。

老婆 こつち

と、同時に奥の部屋から娘がやってくる。

娘 あ、ごめんなさい、気がつきませんでした。

老婆、再び、顔を伏せる。

依頼者 あ、いえいえ。

娘 どうされました？

依頼者 これ、なおせます？

娘 ああ

依頼者 ここ、ちよつと破れて、でも特殊な縫い方でできてるらしくて
娘 ちよつといいですか？

依頼者 あ、はい

依頼者、ひな人形を渡す。

娘 あー、なるほど、これは他じゃ無理ですね

依頼者 できるんですか？

娘 ええ、たぶん。

依頼者 よかった。ここまで来たか良かったです。

娘 ああ、大変だったでしょう、山道で。

依頼者 ええ、でもこんなところでも、家が何軒かあるんですね、あ、ごめんなさい、こんなところって

娘 いえ、いいんですよ

依頼者 すみません

娘 まあ、もうちよつと見てみます

娘、しばらくひな人形を見ている

依頼者、その間に大きな人形を不思議そうに見ている。

人形、瞬き。

依頼者、驚く。

娘 ああ、それ。人形ですよ

依頼者 ですよね

娘 不思議がる人は多いですよ。精巧にできてますからね

依頼者 瞬きも？

娘 瞬き？

依頼者、うなづく。

娘 まあ、しっかりできてるものは瞬きもしますから

依頼者 ええ、そうなんだ

娘 ええ、あくびもおならも

依頼者 え？本当ですか？

娘 最近すごいんですよ、本物みたいな人形がいっぱいできてるんですから。しかも安く。まあ、そのおかげで修理も大変なんですけど。

依頼者 本物？

娘 ええ、人間みたいな

依頼者 ああ、喋ったりしますからね。

娘 ああ、そういうのも、まあ、昔から。

依頼者、手を人形に向けながら、

依頼者 そうですね、喋るのもありますよね

娘 あ、それは喋らないですよ。

依頼者 え、でもさつき。

娘 喋らないですよ。電池抜いてますもん。それ。

依頼者 ああ、電池。

娘 ええ、お腹の。

依頼者 お腹に電池。あー、なるほど。え、じゃあ動かないんですか？

娘 ええ

依頼者 瞬きも？

娘 瞬きも

依頼者 え、いやだって

娘、老婆の前に、ひな人形を置き、

娘 お母さん、これ修理できる？

老婆、起き上がり、ひな人形を見て、

老婆 1時間

といい、無言で奥の部屋に去る

間

依頼者 今のも人形…

娘 いや、人間

依頼者 あ、人間。

娘 ええ

依頼者 ああ、だからさつき

娘 なにか？

依頼者 いえ、なんでも

娘 申し訳ないですけど、1時間はかかるんで、お好きな場所でお待ちになってください。あの、そことか。そこしかないけど

といい、娘、机を指差す。

依頼者 あ、はい。ありがとうございます。

依頼者、人形のそばに座る。

娘 何かいりますか？コーヒーとか
依頼者 え、あ、じゃあお願いします。砂糖多めで
娘 はい

依頼者、まじまじと人間の人形を見る。

人形、かすかに動く。

依頼者、奇妙に見つめる。

人形、小さなあくびをし、依頼者の方を見る。

依頼者、驚き、隣の席に移る

人形、何か喋りそうに、口が動く。

と、娘がコーヒーを持ってやってきて、

娘 あの、ミルクも入れて大丈夫でした？

依頼者、驚き、大げさに振り返る。

人形、前に向き直る。

依頼者 あ、ありがとうございます。

娘 あの、もしかして動きました？

依頼者 え、やっぱり動きますよね。そうですね動くやつですよ。

娘 え、いや

娘、依頼者の方に手を指し

依頼者 あ、私も動きましたけど、これ

娘 それがどうしました？

依頼者 いや、これも動きましたよ。

娘 え、最初からそこに。

依頼者 いや、そうじゃなくて、私は場所を動きましたけど、この人形は、動きました。
頭とか、あとあくび。あくびしましたよ。

娘 眠たいんですか？

依頼者 いえいえ、じゃなくて、この人形が。

娘 人形は眠くはならないでしょ。

依頼者 いや、そうですけど

娘 すみません、わたしちよつとまだ仕事残ってるんで。

依頼者 あ、すみません。でも、嘘じゃないんですよ。

娘 はあ

依頼者 あ、お気になさらず、どうぞ。

奥から老婆、包丁をもってでてくる。

依頼者 うわあ、何？

老婆 …

娘 あ、包丁使うんですよ、綿切るとき。

依頼者 めん？ 料理してるんですか？

娘 あ、いや綿。わたですわた。

依頼者 ああ、綿。で、それを包丁で？

老婆 ちよつと

依頼者 すみません

娘 どうしたの？

老婆 手伝って

娘 ああ、はい。じゃあちよつと。

依頼者 あ、すみません、邪魔しちゃって。

娘、老婆奥の部屋に去る。

間

依頼者、再び、人形を見つめる。

人形、再び、かすかに動いている。

依頼者、思いついたかのようにおもむろに人形に近づく。

人形のそばで膝をかがめる。

人形の服をめくり、お腹のあたりに潜り込む。

人形、くすぐったいように動く。

依頼者、それを感じ、人形を見上げる。

人形、止まる。

依頼者、もう一度、お腹に潜り込む。

そこに、娘がやってきて。

娘 ああの、人形のここゴロゴロしてるので綿追加しときましようか

依頼者、お腹からでて娘をみる。

娘 あの一

依頼者 えつと

娘 お腹、追加しときましようか？

依頼者 電池？

娘 いえ、綿。こつち

依頼者 あ、そつち。こつちは

娘 電池なかったでしょう？

依頼者 いや、よく見えなくて、どこに。

娘 あー、縫い目綺麗ですからね。

依頼者 あー、縫ってる。

娘 うちのお母さん、うまいんですよ。

依頼者 あ、なるほど

娘 もう40年くらいかな

依頼者 始めてから？。このお店。

娘 そうそう、80歳の頃始めたんですって。私を産んだくらいから。

依頼者 なるほど、あ、じゃあ

依頼者、娘を手で指し、

娘 あー、はいもうすぐ40です。

依頼者 見えませんね。

娘 いえいえ、奥さんのほうこそ

依頼者 え、私？ 私はそんな、もうとっくにさ過ぎてるし、

娘 見えないですよ。

依頼者 いえいえ、私なんか

娘 ご結婚されてるんですよね。

依頼者 え？

娘 あ、すみません、人形に名前書いてたんで、子供の字で、あかりって。

依頼者 あー。

娘 あ、もしかして、あかりさん？

依頼者 あ、いえ、あつてますよ。子供の名前で。あかりです。

娘 良かった。あ、指輪されてますもんね。
依頼者 あ、そうですね。あ、あの

依頼者、手を娘に向け、何か言いたげ。

娘 あ、私？私もいますよ。子供。

依頼者 あー、そうなんだ

娘 今、学校

依頼者 そっか、そんな時間か

娘 あ、でももう帰ってくるか。

依頼者 あー、そうですね

娘 あ、大丈夫ですか？時間。まだかかりそうですけど

依頼者 あ、まあ大丈夫です。たのんですから。

娘 頼んでる…

依頼者 あ、家政婦みたいな

娘 ああ、家政婦。

依頼者 あ、いや、そんな大げさなものじゃないんだけど。ちょっと一時的に。

娘 なるほど、ベビーシッターみたいな。

依頼者 ベビーっていうほどじゃないですけど。小学生だし。

娘 ああ、小学生。そっか、じゃあ、家事とかもしなくていいんですね

依頼者 あー、家事。しなきゃなってるんですけど。いや、むしろしたいと思

ってるんですけど、夫がなくていいっていうから

娘 えー、優しい旦那さんなんですわね。

依頼者 ええ。まあ。

娘 いいですね、何もなくてよくて。

依頼者 え、まあ何もってわけじゃないですけど。

娘 ひな祭りですか？

依頼者 え？

娘 ほら雛人形だったから。

依頼者 ああ、そうです。最後のひな祭りですから。

娘 最後？

依頼者 あ、え、いや年齢的に最後かなって。もう小学校卒業しますし。

娘 あー、そうですね。でも、まあ、関係ないと思いますよ

依頼者 …それは

娘 年齢なんて関係ないですよ。大人だって、人形とかぬいぐるみとか部屋に飾ってる人もいるじゃないですか。

依頼者 え、ええ。
娘 だから、いいんじゃないですか、ずっとひな祭りしても。
依頼者 そうですよね。

依頼者、ちらちら、人形を見るので

娘 ああ、まだ気になってるんですか？

依頼者 ええ、ちよつと

娘 気のせいですよ。

依頼者 うーん

娘 ほら、ここ人形だからだから、動いてるように見えるんですよ

依頼者 え、それとどう

娘 ほら、なんか、廃墟とか行ったら木を幽霊と見間違えたり、物が動いたように見えたりするでしょ。

依頼者 ええ、まあ、廃墟行かないですけど。

すると、玄関から男がやってくる。

娘 いらつしやいませ

男 あ、あれ、用意できました？

娘 え？

男 ほらほら、あ・れ。

娘 あ、あれ。聞いてきます。

娘、去る。

沈黙

依頼者 あの、あれって何ですか？

男 え？

依頼者 ごめんなさい、ちよつと気になって。

男 ああ、人形ですよ。

依頼者 あ、まあ、そうだと思いますけど。

男 うん

依頼者 なんかちよつと変わった言い方だったから。あ・れって

男 ああ、まあちよつと特別なんですけど。

依頼者 聞いてもいいですかね。

男、手で、依頼者を招く

依頼者、男のそばによる。

男 じつは…ただの人形じゃないんだ。

依頼者、うなづく。

男 特注品でさ…中に爆弾を仕込んでるんだよ

依頼者 え？

男 いや、ほら、人形に入ったら普通気付かないだろ。子供とかに渡したら、喜んでどこかに持ってつてくれるだろ？ そしたら足がつかずに、ドカンって爆発させられる。依頼者 ほんとですか？

男 まあ、安心しなよ、爆発させるのはここじゃないから。

依頼者 もしかして、ここそういう店なんですか？

男 え？

依頼者 ほら、なんかここ変じゃないですか？ くらいし、気味の悪い人形ばかりだし、店のおばあちゃんは、人形みたいなのに、表情変わらないし。

男 まあね、俺も最初は気味が悪かったよ。でも、腕はいいからね

依頼者 ああ、腕。

男 依頼したらなんでも作ってくれる。

依頼者 爆弾も？

男 ああ。ほら、あのおばあちゃん。ちよつとこわいだろ。そりやそうだ、長年こんなことに関わってたらな。

依頼者 こんなこと

男 ふふ。ほら、だいぶ前、地下鉄で爆弾騒ぎあっただろ、何人か死んで大ニュースになったやつ。

依頼者 ええ。え、うそ！まさか

男 ああ。ああいう人は、表情を変えずに仕事をこなす。あまり、変なこと言わないほうがいいと思うよ

依頼者 あなたも、関わって…る？

男 いや、まあおれは運ぶだけだから。

依頼者 はあ

と、娘が戻ってくる。

娘、袋に入った大きな人形を持ってきて

娘 できてましたよ。これちようど3000円ですね。

男 ああ、3000円。はい。

男、3000円びったり渡す。

依頼者 意外と安いですね。

娘 まあ、穴空いてたの縫っただけですから。

依頼者 それ爆発してるんじゃない？

娘 え？あ、ちようどですね。はい、どうぞ。

男 ありがとうー！もう、仕事できなくて、超困ってたんだよね。

突然、口調が変わる男に驚く依頼者

男 あ、ちゃんとできてるー！

といい、袋から人形を取り出す

男 いや、もう最高

といい、人形を抱きしめる。

依頼者 あの…

男 うん？

依頼者 いや、それ

男 あ、さっきの全部嘘

依頼者 は？

男 いや、嘘に決まってるじゃん。爆弾なんか、作ってるわけないじゃんこんなところで。もう、冗談だったのにー

依頼者 えー、もう、びっくりしたーだって特別なものっていうから。

娘 ああ、あれ、腹話術の人形なんですよ。

依頼者 腹話術？

男 ほら、これ。こうやって

男（腹話術） こんにちは。びっくりさせてごめんね、あははあはは

依頼者、男とは、対照的に静かに男を見つめ

依頼者 ばかみたい

男 もう、怒らないでくださいよ。ごめんなさいって。

男（腹話術） ごめんね。ごめんね

娘 この方、こういう人なんです。

男 はい、普段、ショッピングモールとかでイベントやってるんですよ。腹話術の。

依頼者 はあ。まあ、そうですね、ふつう爆弾なんか作らないですよ。

娘 そんなこと言ったんですか

男 うん、まあ軽いジョークだったんだけどね

娘 普通信じないですよ

依頼者 いやだって、ここのおばあさん、ちよつと怖いから。あ

娘 いいんですよ、よく言われますから。

依頼者 すみません

男 よく言われるって

娘 ちがうお客さんはおかあさんのこと生きる能面っていうんです。

盛り上がる

依頼者 生きる能面！

男 ははは、それは傑作だ。生きる能面かー、確かにねえ

娘 ですよね

依頼者 ははは、むしろあの感じだったら、生きる能面というか生きる鬼の面じゃないですか！？

セリフの途中で老婆がやってきて

一気に静まる

依頼者 え？

老婆 電話

娘 あ、はい

娘、去る。

男 あ、僕も、これでそろそろ

依頼者 あ、え、ちよつと

男、玄関から、去る。
沈黙

依頼者 福の面の方が近いかなあ
老婆 ……
依頼者 いや、なんでもないです。

沈黙
雨降り出す

依頼者 あ、雨ですね。
老婆 ……うん

娘、戻ってくる
依頼者、安堵のため息。

娘 またあれだった
老婆 ……

娘 しつこいわよね
依頼者 どうかしたんですか？

娘 いや、ちよつと警察がね
依頼者 警察？

娘 あ、いや、何でも。ねえ、おかあさん
老婆 ……

娘 関係ないわよね…？

雨が強く降る音。
沈黙

依頼者 あの、何…

と、玄関から男が再び入ってきて、

男 すみません、ちよつと急に降り出して。ちよつと止むまでいてもいいですかね
娘 ええ、かまいませんよ
男 すみません

といい、男近くの椅子に座る。

男 結構強く降ってますね。

娘 そうですね。大丈夫かな

男 どうしたんですか？

娘 いや、まだ娘が学校から

男 ああ、娘さん

娘 傘持つて行つてないんですよね

依頼者 えー、それは大変ですね

男 結構降つてましたよ？大丈夫ですか？

娘 はい、ちよつと見てきます。

男 あ、気をつけて。

依頼者 気をつけてくださいね

娘 いえ、ちよつと外に出るだけですから。

娘、玄関から外に出て、様子を伺う。

老婆、去る

依頼者 (老婆を見つめている) …

男 どうしました？

依頼者 え？

男 座らないんですか？

依頼者 ああ、はい。座ります。

男 ほんと、嫌になつちやうよね、雨。急に降り出すんだから。あ、人形大丈夫かな。濡れてないといいんだけど。

依頼者 人形、濡れたら、ダメになりますからね。

男 ああ、でも防水のものもあるし。

依頼者 それでも、シミくらいつくんじゃないですか？

男 どうなんだろう？ま、これは防水じゃないからな、気をつけないと。あ、大丈夫そうです。

依頼者 ああ、良かった。

男 まあ、なんか話しましょうよ。せっかくだし。あ、コーヒーいいなあ、僕も飲みた
いなあ。

依頼者 あ、私ももうないんですけど。

男 うーん、僕、コーヒー好きなんですよ。なんか、わかんないけど、コーヒーがあつ

たら話が進むっていうか。あ、お酒とかはダメなんですけどね、ま、そういうものです。
依頼者 はあ

男 そうそう、それで受けに行っただんですよ。コーヒー検定
依頼者 そんなのあるんですか

男 ええ、毎年あるやつ。ま、落ちただけど、あー、でも欲しかったなあ。スプーン
依頼者 スプーン？

男 ええ、受かったらもらえるんですよ。特典で。スプーン。コーヒー混ぜるやつ。
依頼者 ああ、なるほど。

男 ああ、でもいいなあ、欲しいなあ。

依頼者 まあ、頼めば出してくれるんじゃないですかね
男 スプーン？

依頼者 いや、コーヒー。さっきの人に言えば。

男 あー、そうだね。もらいたいなあ

依頼者 わたしも、もう一杯飲みたいかなって感じなんで。

男 あ、じゃあ頼みますか。

と、タイミングよく、娘が戻ってくる

娘 来ないみたいです。

男 あー、まあもうちよつと待ったら。

娘 ほんと嫌になっちゃいますよね。

依頼者 どうしたんですか？

娘 いや、なんか雨の日っていつもに増してストレスが溜まるっていうか…

依頼者 わかります。

娘 あ、わかってくれます？もう、ほんと最近忙しくて。こう見えて結構修理の依頼多いんですよ。郵送でできるようになってますから。もう、それでずっと。掃除もしないといけないですし、洗濯も料理ももう

依頼者 はあ

娘 あ、ごめんなさい、やっぱり迷惑ですよ。

依頼者 あ、いえいえ

男 まあ、大変なんですね

娘 ええ、もう、ほら、お母さんいるじゃないですか

男 あ、あのおばあさん？

娘 ええ、お母さん、全然喋らないんですよ。私にもですよ？全く、何も。表情を変えないっていうか。

男 ええ

娘 で、そのくせ食事の用意とか全部私が面倒見ないといけないからもう、困っちゃって。料理運んだり、飲み物ついだりくらい自分でしろって感じですよ。そりゃ、まあお母さんの人形の修理はうまいですよ。まあ、わたしもいつか見習わないとなってるんですけど、ええ、それでこのお店成り立ってますから、でも、それを支えるこっちの身にもなって欲しいっていうか、店のこと全部任せられたってこちだってやになっちゃいますよ。ほんと。だいたい、あの人店番するって言ってもほとんど存在感ないから、結局私がするし、最近、ああしろこうしろって客もうるさいし、ほんとやになっちゃいます。できることくらいしろっていうの。

依頼者 はあ。

男 そうですよね、ええ。

娘 あ、わかってくれます？

男 ええ、もちろん

依頼者 はい。

依頼者・男 コーヒーを頼みづらくなってきますぞうだ。

娘 あ、コーヒー出しましょうか。

男 え、いやいや。いらなそうですよ。

娘 え、でも、雨、止まないし。

男 いや、全然、僕コーヒー苦手なんで。

娘 そうなんですか

男 あ、でも

娘 え？

男 ちよつと欲しいような…

娘 いや、嫌いなら全然

男 あ、自分でします。自分で。

娘 いや、そんな

男 ああいえ、自分でしますから。はははははは

娘 いえ、本当にいいですから。

男 ああ、そう？すみません、じゃあブラックで。

依頼者 あ、わたしもいいですか？ もう一杯。

男 え？

娘 構いませんよ

娘、空いたコーヒーカップを下げた奥の部屋に行く。

沈黙

男 いや、大変なんですネ。

依頼者 ええ。

間

依頼者 あの、本当にあのおばあさん、何もしてないんですよね

男 なにもって

依頼者 ほら、爆弾とか。

男 さすがにないでしょ。冗談ですって。爆弾なんて簡単に作れるもんじゃないでしょ

依頼者 まあ、爆弾はそうかもしれないですけど

男 うん

依頼者 実は、あのさつき

男 はい

娘、戻ってきて、

娘 はい

コーヒーを机に置く

男 あ、ありがとうございます

依頼者 ありがとうございます

娘 じゃ、わたし手伝ってくるので、なにかあったら

依頼者 ええ。

娘去る

間

依頼者 えっと、だから

男 うん

依頼者 さつき電話があったみたいで。

男 うん、電話？

依頼者 ええ、電話、警察から。

男 警察？ なんで

依頼者 それはわかりませんけど

男 なんだ、わかんないのか

依頼者 ええ、でも絶対なにか関わってますよ、あのおばあさん。
男 なにかって？

依頼者 何かってまあなにか悪いこと

男 わるいことっていったって、いろいろあるしねー…

依頼者 まあ、そうですね

男 まあ、確かに不気味だけど

依頼者 絶対何かしてますよ

男 まあ、僕もちよつと考えもなくもないけど

依頼者 ですよー

男 あー、でも気のせいだよ気のせい。なんか、部屋がこんな空気だから、そう思うだけで、ほら廃墟とか行ったら木を幽霊と見間違えたり、物が動いたように見えたりするでしょ。それと一緒に。勘違いだよ。

依頼者 んー、まあ、そうかもしれないですね、廃墟にはいかないけど。

男 ま、山道ですしね。

依頼者 あー、そうですね、

男 最近、よく聞くじゃない？

依頼者 なにをです？

男 ほら、事件だよ、事件。強盗とか誘拐とか殺人とか

依頼者 あ、やっぱりそうなんじゃないですか？

男 いや、そうじゃなくて、ニュースとかでよく聞いているから、そういう風に思うだけだよ。

依頼者 えー、いやだって、そうなんですかねえ

男 まあ、確かに不気味だからね

依頼者 あ、そういえば、この人形、どう思います？

男 何が？

依頼者 不気味じゃないですか？

男 うん、まあそれは

依頼者 わたし、さつき動いたように見えたんですよ。

男 また、そんなこといい出して。

依頼者 いや、気のせいだとは思いますが。ええ。

男 動いたってどう動いたの？

依頼者 え？

男 いや、どう動いたように見えたのかなって。

依頼者 まず臉が動いたんです。こうパチパチって。

男 まぶたが？ 瞬きってこと？

依頼者 ええ。

男 いや、そんなことはないでしょう。

依頼者 本当に、見えたんです。

男 うーん、で？ それから？

依頼者 あくびしました。

男 あくびってそんな人形でしょ。眠くなんかならないんだから。

依頼者 まあ、でも、わかんないですよ、人形だって生きてるのかも

男 はあ？

依頼者 私、結構そういうの信じちゃう人で、あのほら幽霊とか妖怪とか。子供の頃から、そういうのダメで。なんていうか作り話だと思ってても、こう怖くなっちゃうんですよね、もしかしたら、本当にいるんじゃないかって。誰もまだ気づいてないだけじゃないかって。

男 いやいや、もう子供じゃないんだから。

依頼者 それはそうですけど、でもないですか？シャワー浴びたら、突然、幽霊のこと考えちゃって、したらもうなんか急に怖くなって、後ろに誰かいるんじゃないかって、それでそこに居られなくなっって浴室からとび出しちゃうこととか？

男 ないですね

依頼者 ええ！ 私だけですか…

男 まあ、いずれにせよ気のせいですよ。それも、これも。

依頼者 そうかなあ

男 あ、あれじゃないですか？

依頼者 え？

男 ほら、最近の人形って結構凝ったようにできてるから、そういう仕掛けがあってもおかしくないんじゃないですか？もともと、結構人間にそっくりですし。

依頼者 でも、でもですよ、さっきあの女の人が、あ、あのおばあさんじゃなくて

男 うん、わかるよ

依頼者 あの人、電池入れてないって。これに

男 あ、もともとそういう仕組みはあるんだ。

依頼者 ええ。

男 だったら、本当は入ってるんじゃない？間違えて入れてたとか。

依頼者 ああ、やっぱり、私もそう思って調べたんですけど

男 なかった？

依頼者 いや、わかりませんでした。

男 わかんない？

依頼者 ええ、ちよつと、どこかわからなくて

男 背中とかじゃない？

依頼者 いや、お腹です。

男 え、お腹？
依頼者 ええ
男 どれどれ

といい、人形の前に屈み、人形の服を捲り上げる。

男 ああ、本当にわかんないな
依頼者 もっと上の方じゃないですかね
男 あー、なるほど

男、さらに服をまくりあげようとするが、

男 いや、やめとこう

男、服から手を離す。

依頼者 どうしたんですか？
男 なんかやつちやいけないことのような気がする。
依頼者 人形ですよ
男 まあ、そうなんですけど、そっくりだから
依頼者 まあ、そっくりですよ。人間みたい。
男 そのうち動き出すんじゃない？
依頼者 だから動き出しましたって。
男 冗談だよ。まあ、でも無理ないかもね、これだとそっくりだと。
依頼者 ええ。
男 もしかして、誰もいなくなると、スーって起き上がって
依頼者 やめてくださいよ、寝られなくなります。
男 テクテクテクって歩いていって、ひとりでに、踊り出したりして。
依頼者 もう、ほんとにそこまでいったらもう本物の人間じゃないですか
男 なに？人間ならおどるの？
依頼者 いや、人間だから踊るわけじゃないけど、踊るのは人間です。
男 あー、こんな感じかな？人形の舞

男、変な動き。

依頼者 なんか、それは怖くないですね。

男 そう？

依頼者 なんか、もつとこうきれいにおどるんじゃないですか？ こんな感じに。

依頼者、一回転。

依頼者 あ、やばい、考えちゃった。これは寝られなくなるやつだ。

男 いやいやいや、もつとこうだよ。こう

男、さらに変な動き。

依頼者 えー、こうですって

依頼者、再び、綺麗なステップ

男 いやいやいや、こうだよこう

男、さらに変な動き

と、同時に娘やってくる

娘 あ

男 あ

沈黙

男 ないない。やつぱりないよ、そんなこと。

依頼者 まあ、そうですね

娘 どうしました？

娘、机を拭く。

男 いや、なんでも。あ、トイレお借りしてもいいですかね。ちょっと冷えちゃって。

娘 あ、コーヒー冷めちやいましたか？

男 あ、いや普通に、寒いから。

娘 ああ、向こうです。案内しますね。

男 すみません。

娘、男、奥の部屋に行く。

依頼者と人形だけ

依頼者、コーヒーを飲みながら、時折、人形を見る。

人形、今回は動かない。

依頼者、立ち上がり、カウンターの方へ行く。

人形、近くのコーヒーを飲む。

依頼者、振り返ると、人形止まる。

依頼者、もう一度、カウンターの方向に向くと、人形、コーヒーを飲む。

依頼者、振り返り、今度は気づいたかのように、奥の部屋に走り去る。

人形、今度は男のコーヒーを飲む。その様子はまるで人間。

間

娘、奥からくる。

娘
あれ？

依頼者がいないことを不思議に思い、あたりを見渡す。

コーヒーが飲まれていることを確認し、お盆にコーヒーを乗せる。

途中、男の持ってきた腹話術の人形が気になり出す。

バレないように警戒しながら、こっそり手にはめる。

娘
もう疲れたよ

娘（腹話術）どうしたんだい？

娘
こんな雨なのに、お客さん多くて。

娘（腹話術）多いつていつたつてまだ二人じゃないか

娘
確かに、ふふふ

娘、人形を動かして遊んでいる。

だんだんエスカレートし、人形を曲げたり変な姿勢にしたりする。娘、どこか楽しげ。

娘笑いながら、人形を机に叩きつけ出す。

ストレスを発散しているようだ。

途中、ハッと気づいたように、人形を手から外す。

あたりを振り返るも、誰もいない。

ホッとしていると依頼者、奥から出てくる。

娘 ひゃ！

依頼者 あ、いたいた、どうしたんですか

娘 あ、いえいえ、奥さんこそどうされたんですか？

依頼者 いや、さつき、またそれが

娘 またその話ですか

依頼者 いやだつてコーヒー飲む人形っておかしくないですか？

娘 気のせいですつて。

男、トイレから戻ってくる。

依頼者 気のせい…じゃないでしょ

男 またどうかしたんですか？

依頼者 いや、またこの人形が。

男 またですか？て、あれ、これ僕の人形。

依頼者 どうしました？

娘、顔をそらす。

男 なんかいつもに増して、可愛く見えるな。

依頼者 は？

男 いや、なんかわかんないけど、いつもと違う。丸くなったっていうか。

依頼者 丸くなった…

男 うん、なんかわかんないけど、気のせいかな

依頼者 気のせいですよ。

男 そうだよねえ

依頼者 あ、でも、私のは違いますからね

男 うん？

依頼者 これ、気のせいじゃ、ないですからね。

男 気のせいだつて

娘 気のせいですよ。

依頼者 ええ

男 ほらこんな天気だから

依頼者 あー、まあ。

娘 あ、これ持っていきますね。

男 あ、僕いきますよ。

娘 え、でも

男 あ、いいです。いいです。

娘 え、じゃあ、向こうの流しに。わかります？

男 あのトイレの隣？

娘 ええ

男 ああ、大丈夫です。

男 コーヒーを乗せたお盆を奥の部屋に持っていく。

娘 あ、人形、順調になおってますよ

依頼者 ああ、よかった

娘 人形、好きなんですね。

依頼者 え？

娘 いや、ほら、さつきから人形、見てらっしゃるから。

依頼者 いや、これは…

娘 いや、それもだけど、ほら、こっちのとか

依頼者 そうですかねえ

娘 ええ。

依頼者 まあ、好きですから、人形。なんか、結構色々あつて…これ全部集めたんですか？

娘 あー、まあ大体は寄付です。私が子供の時に使ってたのもありますけど。気味の悪い人形も、もらったものだから捨てられなくて。

依頼者 あー、なるほど。でも、その気持ちわかりますよね。あー、いや子供の頃使ってた人形と違って、なかなか捨てられないじゃないですか？まあ、いつの間にかなくなったのもあるけど。なんか、もったいないっていうか、かわいそうっていうか。変ですよ、人形なのに

娘 いや、全然変じゃないですよ。

依頼者 私、人形とかによく話しかけるんですよ。昔から、人形と一人で遊ぶのが好きで、あー、私、箱入り娘だったんで。甘やかされて、人形に囲まれて育て、あ、子供の頃ですよ。今は…今もちよつとだけ。ちよつとだけですよ。

娘 ふふふ

依頼者 旦那も優しいから、全然何もなくてよくて、子供のまま育っちゃったっていうか、なんていうか。あ、いや、ごめんなさい。それで、いまでも、寝てるんです。人形と一緒に。なんか落ち着かなくて。最初は、子供と一緒に寝てたから、いいかなって思ってたけど、もう子供も小学生になったし、やめないとって思ってるんですけど。あ、だから、最後ってそういうことなんです。

娘 最後？

依頼者 あ、さつきの雛人形。

娘 ああ

依頼者 子供のひな祭りって言うっておきながら実は私の方が楽しんじゃったりして、だけど、もう最後かなくなって。

娘 いいんですって、だって言ったじゃないですか、そういう人もいるって。だから、全然いいんですよ。全然。

奥から男の音がする。

男(声) あの、すみません、ここでいいんですよね？なんかよくわかんないんですけど

娘 あ、今行きます。

娘、奥に行く。

依頼者、一人になって置かれてある人形を見る。

猿のシンバルの人形や、食い倒れ太郎のドラムなど愉快な人形がひとりでに動く(もしくは、依頼者みずから動かす。)

依頼者 わ

人形 ふふふ

依頼者 え？笑った？今笑ったよね？

人形 …

依頼者 ねえ、笑ったでしょ？

電気がチカチカする。

オルゴールがなる。

依頼者 え、なにこれ。

人形、立ち上がり、依頼者に近づく。

依頼者 うそ、やっぱり。ちよつと待って、こないで。

雷の音。

依頼者 きゃ

依頼者の悲鳴と同時に、停電になる。暗転。

その間に人形、元の椅子に戻っている。

しばらくして電気がつく。

依頼者 あれ、人形

娘 雷、大丈夫でした？

依頼者 ええ、停電なおるの早いですね。

娘 停電？

男 停電って？

依頼者 いや、停電したじゃないですか？

娘 いや、雷は確かにおちましたけど、この辺に。でも、停電はしてないですよ、ほら

依頼者 いや、今はついてますけど、あ、あと、人形も動いたんです。停電する前に。

男 もう、頭の中ファンタジーですね

娘 そうですよ、人形が好きだからって、そこまで妄想を膨らませなくても

男 うん、尊敬しちゃうよ

依頼者 いや、そんなんじゃないよ

男 まあ、気のせいだよ。

娘 ええ。ほら湿気すごいし…

娘、外を指差す。

依頼者 …関係ありますか？

娘 ええ、たぶん。

娘、玄関の方から外を見る

男 娘さんですか？

娘 ええ、遅いなあ

男 大丈夫ですかね、雷。

娘 そうですねえ、あ、でももうだいぶ雨雲行っちゃったんじゃないかな？ほら

依頼者 小学生でしたっけ

娘 いや、うちは中学生。女の子。

依頼者 あ、そうでしたか、すみません

娘 いえいえ。

男 あ、あなたも子供いるの？

依頼者 ええ。小学生です。もう卒業ですけど

男 へー、あー、じゃあ、人形とかぬいぐるみとかもう卒業する感じかな。もったいな
いよねー、小さい頃は、あんなになんかほら着せ替えたり、人形

依頼者 あー。さつき、その話してたんですよ、ねえ

娘 あ、はい、大人でも、別に人形で遊んでもいいんじゃないかって。

依頼者 ええ、そういう人いますし。

男 あー、まあ確かに。あ、こんな感じ

男（腹話術）大人になっても遊ぼうね

依頼者 それはちよつと違うかも…

娘 あ、雨やんだんじゃないですか？

依頼者 え、もうですか？さつきまで雷なつてたのに、

男 天気変わるの早いですからね。

娘 あ、じゃあ

男 ああ、そうですね、じゃあ、僕はこれで

と、男立ち上がって出ようとする。

娘 どうもありがとうございます。あ、すみません、もうちよつと待つてくださいね。

依頼者 ああ、はい。ぜんぜん

その時、玄関から中学生（孫）がやってくる。

孫 ああ、もう最悪。

娘 あ、遅かったね。

孫 急に降り出して、ちよつと待ったら止むかなって思ったんだけど雷までなりだして

娘 やんでない？

孫 まだ降ってるよ、全然。

娘 あ、そうなの

男 あ、そうなんですか

娘 ごめんなさいね

男 いえいえ

孫 ああ、最悪。

娘 これで拭きなさい

娘、タオルをとってわたす

孫 ありがとうございます
男 あ、娘さん
娘 あ、ええ。
男 やっぱり
孫 どうも、いらっしやいませ。

孫、丁寧にお辞儀

依頼者 かわいらしいですね
孫 え？
依頼者 お洋服、かわいいね。
孫 そうですか？ ありがとうございます。濡れちゃいましたけど。
娘 着替えてきたら？
孫 えー、せっかく褒められたのに
依頼者 いや、気にしないで
孫 では、失礼いたします。

といい、まるで西洋のお嬢様のようにお辞儀をして去る

依頼者 (つぶやくように) かわいい
男 え？
依頼者 いや、かわいくなかったですか？
男 あー、服？
依頼者 いや、服もだけど、なんか全部。顔も。立ち方も。ほらお辞儀とか
娘 あれはふざけてるだけですよ
依頼者 まあ、それはそうかもしれないけど
男 まあでも、たしかにお嬢様みたいでしたよね
娘 そんなあ
依頼者 ほんとにそうですよ、どつかのお嬢様？お姫様？あのかわいくて白い顔。あー
いい！ なんか、あのギュツとしたくなる感じ。わかる？ なんとしかもうお人形さ
んみたい。あ、ここらへんの不気味な人形じゃなくて、かわいらしい人形。
男 お姫様じゃないんですか？
依頼者 お姫様のお人形！ あー、好き、大好き！

沈黙。娘、苦笑い。

男 大丈夫ですか？
依頼者 (目力つよく) 大丈夫よ。
男 (怯んで) ああ、はい。
娘 なんか、ありがとうございます。
依頼者 いえいえ
娘 あ、私ちよつと行ってきますね
依頼者 あ、あの子のどこ？
娘 いえ、おかあさんのところ、修理、手伝わないと。
依頼者 ああ、そっち

娘、去る

男、依頼者座る。

男 なんか、楽しそうですね。
依頼者 いや、なんか幸せですよ。
男 ぼくにはわかんないなあ
依頼者 可愛い子見ると幸せになりませんか？
男 いやー、まあ男ならそうかもしれないけど
依頼者 男じゃないですか
男 まあ、でも中学生ですから。
依頼者 ああ
男 ああ、でもわかりますよ
依頼者 え！？
男 あ、いや、そういう意味じゃなくて、人形みたいって
依頼者 ああ、そうですよね
男 ええ、なんかみんな人形なんですね
依頼者 みんな？
男 いや、ほらおばあさんも人形みたいって
依頼者 ああ、でもあれは可愛くないっていうか、不気味っていうか。
男 まあ
依頼者 あのおばあさんの孫とは思えないわ
男 ああ、確かに
依頼者 あ、でも、あの人は普通じゃないですか
男 ああ、真ん中の
依頼者 真ん中？
男 真ん中 ほら、おばあさんがいて、その子供。で、あの女の子の母親。

依頼者 あー、そうですね。で、そうその真ん中。でもやっぱり真ん中ってなんか変ですよね

男 あー、じゃあ奥さん。

依頼者 あー、奥さん。

男 で、どうしたんですか？

依頼者 あー、いや、だからその奥さんは別に人形じゃないじゃないですか。

男 うん

依頼者 え、だつてさつき、みんな人形っていうから。

男 ああ、それは、よくあるじゃん。全員って言っておいて別に全員じゃないとき。

依頼者 ああ、まあ、ありますよね。

男 それですよ

依頼者 あー、なるほど

孫、着替えてやってくる

依頼者 あー、その服もかわいい

孫 本当ですか？ ありがとうございます。

依頼者 あ、ごめんね、変なおばちゃんだと思ってるでしょ。まあ、人形受け取ったら、すぐ帰るから。

孫 いえいえ、ごゆっくりなさってください

依頼者 いやいや、いいのよ、そんな丁寧な言葉使わなくても。

男 そうだよ、ほら子供らしく。

男（腹話術） 楽にしてもいいんだよ。

孫、何も言わず、ただにこやか

依頼者 もう、こまってるじゃない

男 ああ、ごめん

男（腹話術） ごめん

孫 いえ、全然。楽しくていいですよ

男 あ、ありがとう

依頼者 あ、座る？

椅子がないので

依頼者 あ、でも、うーん

依頼者、人形を見て

依頼者 これなんとかならないかなあ

男 いや、そこにおいてあるんだから

依頼者 でも、不気味だし

孫 いいですよ、動かしても。

依頼者 あ、そう？

孫 もう捨てるらしいです。

依頼者 捨てる？

孫 ええ、お母さんがもう邪魔だしって

男 え、なんで

孫 あ、お父さんが言い出して、気味が悪いし、さすがにそこには置けないだろうって

依頼者 あー、お父さん

男 えー、なんか勿体無いなあ、こんなにうまくできてるのに。

依頼者 あー、だからか

男 何がです？

依頼者 いや、さつき、電池はいつてないって言ってたから。

男 あー、でもそれにしてもこれどうやって捨てるんですか？燃えるゴミ？

依頼者 プラスチックだったら燃えないし、綿とかは燃えるだろうけど。うーんなんでできてるんだろ。これ。

依頼者、人形を触りながら

依頼者 プラスチックではなさそうだけどなあ

男も人形を触って

男 そうですねえ。素材まで、人間そっくりですねえこれ。

依頼者 素材って、そんな。

男 いいじゃん、素材で。人間の素材。

孫 タンパク質

男 あー、よく知ってるねえ。そうそう。タンパク質ってなんだっけ、脂肪？

孫 脂肪は、脂肪ですよ。タンパク質は、アミノ酸。

男 え、アミノ酸？アミノ酸ってなんかこう体にいいやつじゃないの？健康食品に入ってるみたいなの

依頼者 だからじゃないですか？
男 え？

依頼者 だから、アミノ酸からタンパク質ができるんだから、アミノ酸をとったら、健康にいいんじゃないですか。

男 ああ、まあそうだけ。

依頼者 え、てことは、これアミノ酸からできてるんですか？

男 あー、そうなんじゃない？知らないけど。まあ、人間そっくりだからね、この感触。

依頼者 やっぱ人間なんじゃ

男 もういいよ、その話は。

依頼者 はい。え、で、結局これは何ゴミ

男 粗大ゴミなんじゃない？

依頼者 あー、まあ確かに。バラバラにするわけにもいかないですしね。

男 バラバラって。これ、バラバラにして捨ててたら、それこそ殺人事件だよ。

依頼者 えー、でも燃やすなら。

男 だから、これ燃えるの？

孫 燃えますよ。人間なら。

男 え？

孫 人間だったら燃えます

依頼者 まあ、そうだけど

男 でも、これは人間じゃ

孫 ええ、でも燃えます。それは燃えます。

男 それはどういう？

依頼者 あ、だから、あまりにも人間にそっくりだから、燃やせるんじゃないかってそういうこと？

孫 ええ

依頼者 あ、そういう

男 予測の話ね

依頼者 あ、まあ、じゃあどかしましょ。ちょっと持ってください？

男 ああ、はい。

二人、人形を持つ。

依頼者 え、今、関節曲がらなかった？

男 そこまで精密なんだ。

依頼者 ああ

依頼者 え、今動かなかった？

男 気のせい気のせい。

といい、一旦部屋の奥に去る男と依頼者と人形

孫、一人残る。間

孫、ゆっくりと踊り出す。

動きがとまったころに娘、やってくる。

娘 何か言った？

孫 なにも

娘 なんて、運んでるの

孫 いや、邪魔だったから

娘 そう…変なこと言っちゃだめよ。いい？

孫 うん

娘 いい？

孫 うん

男と依頼者、戻ってきて、

男 あ、どうも、向こう、おいときました。あの、大きな日本人形のところ。

娘 ああ、どうも。ありがとうございます。

依頼者 随分と重たいですね、やっぱり

娘 ええ

などといいながら、男、依頼者、孫、椅子に座る。

依頼者 あ、足りない

男 ああ

娘 あ、わたしはいいですよ。すぐもどるんで

依頼者 そうですか、すみません

男 ああ、これで足りる。

孫 よかったです

と、タイミング悪く、玄関から男（警察）が私服でやってくる

依頼者 はあ、また足りなくなつた。最悪

男 最悪
孫 最悪
男 (腹話術) 最悪
娘 (誰よりも腹黒い声で) 最悪

みんな、娘を見る。

警察 あ、これはどうも

娘 なんてきたのよ!

男 あ、いや、そんな怒らなくても。

依頼者 そうですよ、ちよつとタイミングが悪かっただけでそんなに

娘 話すことなんて何も無いわよ!

依頼者 いや、だからそんなに、きたばかりなのに

男 そうですよ、僕たちなんかずつと話してるだけなのに

警察 いや、あなたのお母様について、まだ話を聞かないといけないことがあります。

男 え?

娘 だから、母は何も知らない。関係ないっていつてるじゃないですか

男 それは、あなたからじゃないですか、一旦本人と話をさせてくれませんか

娘 だから、話しても無駄ですって。

警察 うーん、とはいってもねえ

娘 まだ逮捕状とか出てないんですよ。

警察 まあ、それはそうですけど

娘 じゃあ出て行ってください。

警察 わかりました。でも、今日中にまた来ますからね。

警察、去る。

娘 すみません、大声出して。

依頼者 あ、いえ、いいんですけど、どうしましたか?

男 お母様、どうかなされたんですか?

娘 いや、別に。

依頼者 あ、言いたくないならいいんですけど、ちよつと気になって。すみません

娘 はい、ちよつと、ごめんなさい。

依頼者 あ、そうですよね、私たちが首突っ込んでね。

男 そうですよね。

娘 あ、私、母のところへ行くので

依頼者 ああ、はい

娘、去る

依頼者と男、目を合わせ小声で会話する。

依頼者 これは…

男 そういうことですよね…

依頼者 そうですね

男 疑いが確信に変わりましたね

依頼者 そうですね

沈黙

依頼者 あの

男 はい

依頼者 そういうことって何ですか

男 わかつてなかったんですね

依頼者 まあ、なんとなくはわかりますけど

男 まあ、子供さんいますからね

男・依頼者、無言で、孫を見る

孫 あ、わたし、飲み物とってきます。

男 あ、はい

依頼者 どうぞ、ごゆっくり

孫、去る

依頼者 そういうことですよね

男 ええ、きつと

依頼者 やっぱりあのおばあさん、何かしてたんですね

男 たぶん

依頼者 あ、やっぱり！

男 ええ、なんか嬉しそうですね。

依頼者 いやいや、別にそういうわけじゃ。

男 いや、嬉しそうですねよ。

依頼者 いやいや、ただ、予想通りだったなっていうか

男 あ、でもそれちよつとわかります。結果はどうあれ、予想が当たったら嬉しいですよ

依頼者 嬉しくはないですけど

男 あ、そうなんですか

依頼者 なにしたんですかね？

男 あ、おばあさん

依頼者 ええ、

男 さあ、盗みとか

依頼者 ええ、そんなことないでしょ、

男 じゃあなに？

依頼者 殺人とかしちやったりなんかして。

男 えー、それは、冗談にしては言い過ぎですよ。

依頼者 冗談、なんですかね

男 冗談にしてくださいよ。それだったら、僕らだって殺されちゃうかもしれないですよ。

依頼者 殺されちゃいますねー

男 どうやって殺すのかな、やっぱさっきの包丁？

依頼者 さあ、もつと巧妙かもしれないですよ

男 巧妙？

依頼者 うーん、首絞めたり

男 それ、巧妙なのかな

依頼者 じゃあ、毒で殺したり

男 あー、

依頼者 血抜いたり。

男 いやいや、どうやって

依頼者 こう、ガブって

男 いや、吸血鬼じゃないし、

依頼者 そうですよねえ、

男 そりゃそうですよ

孫、もどってくる。手には、トマトジュース

依頼者 あ

男 あ

孫 おばあちゃんが作ってくれたんです、これ。

男 えっとそれは…
孫 トマトジュース
男 ですよね
依頼者 まあそりゃそうだ。
孫 あ、要ります？
男 え、これを？
孫 はい、まだ材料いっぱい余ってるみたいで。
依頼者 ぎ、材料？
孫 え、トマト
依頼者 あ、はい。まあ、そうですよね
男 うん
孫 どうしたんですか
依頼者 いや、別に。
男 ねえ、おばあちゃんのことどう思う？
孫 どうって、好きですよ
男 あ、好きなんだ。
孫 え、うん
男 怖かったりしないの？
依頼者 ちよつと、しつれいなんじゃ…
孫 いや、まあ、顔はね、ちよつと怖いけど、実は優しいんですよ。っていうか、ああ
みえて、シャイなんです。
男 シャイ？
孫 ええ、あんまり人と話さないっていうか、家族とぐらいしか。
依頼者 へー、そうなんだ
男 あれ、でもさつき、お母さん、おばあさんとあんまり喋らないって。
孫 あー、まあ。
依頼者 まあ、親子でもいろいろありますからね
男 あー、そうだね
孫 ええ、だから、別に好きですよ、私。
男 まあ作ってくれるしね、それ
孫 おいしいですよ
依頼者 おいしそう。トマトだったら。
孫 トマトですよ
男 怒ったりはしないの？
孫 おばあちゃん？
男 うん

孫 全然しないですよ。人形修理してる時に話しかけたら、包丁向けられて、怖かったけど

依頼者 だいぶやばくない？それ

孫 あ、でも普段はふつうに優しいですから。ちゃんと笑いますし。

男 え、わらうの？

孫 ええ、もちろん

男 なんか意外だな。全然表情かえなかったから、ねえ

依頼者 ええ。

男 そっかそっか、笑うんだあのおばあさん、なんか想像つかないなあ

依頼者 お母さんは？

孫 お母さん？お母さんはちよつと怖いかも

男 え？お母さんが？そうなの？おばあちゃんとどっちが怖い？

孫 うーん。お母さんかな。

男 ほんとう？なんでなんで

孫 だって、すぐ怒るし、早く寝るとか、片付けるとか、嫌になっちゃいます。

依頼者 あー、まあそれはね

男 お母さんだからね。

依頼者 孫にとつて、おばあちゃんつてやっぱ優しい存在なんじゃないですか？私も、お母さんに怒られた時は、すぐにおばあちゃんのところに行って甘えてましたから。

男 ああ、そうなの？

依頼者 そういうことなかったですか？

男 僕は、なかったねー、あ、祖母は、比較的早くにみんな死んじゃいましたからね。

依頼者 あー

男 あ、おじいちゃんは？あと、お父さん

孫 死んじゃった。二人とも

男 あ、ごめん

孫 いえ、

依頼者 あれ、でもさっきお父さんつて言ってなかった？ほら、人形捨てるみたいなの

孫 ああ、最近なんです。お父さん、死んだの。

依頼者 そうなんだ、大変だね。

孫 いえいえ、だから、ちよつとみんなピリピリしてて。

依頼者 わかります

孫 お父さんも結構厳しい人で、身なりとか言葉遣いとか

依頼者 あー、だからそんなに

孫 ええ

男 まあ、いいのかわるいのか

依頼者 あー、でも、二人とも厳しかったら、大変よね。

男 うん、そりやおばあちゃんに甘えたくもなるよ。あの、おばあさんにね

依頼者 あのってどういいういみですか

男 まあ、そりや、あのだよ。

孫 お父さん、自分のいうとおりじゃないと怒るから、時間通りにご飯が出ないと怒るし、ちよつと音立てたら怒鳴るし、もうお母さんも結構迷惑してました。

男 ああ、亭主関白なのかな

依頼者 いますよね

孫 家具の位置とか、人形の位置とか、こだわりあるみたいで、それもお父さんが、お母さんに全部やらせて。お母さん、結構ストレス溜まってたみたいです。

男 あー、あの人も大変なんだね。こだわりかあ、まあそのわりには、汚いですけどね

依頼者 あー、まあ。こだわりですから

孫 あ、まあだから、おばあちゃんが一番私にとっては親しいっていうか

依頼者 なるほど

孫 おばあちゃんの笑うとこみてるの楽しいですよ。

依頼者 ええ、そうなのかな

男 なんか、みてみたいな

孫 あ、ちよつと変わってるけど

依頼者 なにが？

孫 あ、笑い方。

依頼者 あー。

間

男 あー、でもそうか、じゃああのおばあさん、人形じゃなかったのかー

依頼者 え？

男 いや例えですよ。さつき話してたじゃないですか、おばあさんが無表情で人形みた
いって。

依頼者 ああ、まあ

男 でも、笑うってことは、人間ってことですよねえ

依頼者 まあ、そうですね

男 えー、やっぱりちよつとみてみたいなあー。

男（腹話術）みてみたいなあー

孫 私と二人のときはわりとよくわらいますよ。あ、後、一人の時にもよく

男 ええ、そのときだけかー、残念だなあ

依頼者 うーん、確かに見たいですね

と、そこに別の女の客がやってくる。

女 あ

依頼者 あ、どうも

孫 いらつしやいませ

女 あのですみません、ちよつとこの山の向こうにいこうとしたんですけど、ちよつと車がガス欠で

依頼者 あ、それは…

女 だからあの

依頼者 電話しましょうか？

女 え？

依頼者 あ、どこかそういう

男 ロードサービスみたいなの？

依頼者 あ、そうそう

女 あ、そうじゃなくて、ちよつと今急いでて、電話はあるんですけど、それじゃあ遅いかなって。

依頼者 時間がかかるってこと？

女 あ、はい

男 じゃあ、どうすれば…

女 ガソリンとかないですかね

依頼者 ガソリン…

女 あ、はい。あ、なかつたらいいんですけどっていうか普通ないですよ。ごめんなさい

孫 あ、ちよつと呼んできます

孫、奥に行く。

依頼者 ごめんなさい、私もただの客だから。

女 あ、なるほど。

依頼者 雨、すごいですね

女 ああ、雨。最近、急に降っちゃって嫌ですよ、今日は止まないのかしら？

男 え、止まないよ、僕帰れないんですよ、

女 あら、歩いてきたんですか？ここまで

男 ええ、まあ、そんなにないですから。

娘と孫がやってきて、

娘 あ、どうかされました？

女 すみません、ガソリンってないですかね。

娘 あ、切れちゃった？

女 ええ

娘 あーガソリン

女 ないですよー

娘 ありますよ

女 え？

娘 非常用のガソリンがたしか、倉庫に。ほら、そのの。

娘、窓の奥を指差す。

女 え、ありがとうございます。

娘 ええ、じゃあ

男 あ、僕、行きますよ。

娘 ん？

男 ああ、いや、お忙しいかなっていろいろ。

娘 いや、私行きますよ。

男 いやいやいや、僕たちここにも暇ですから。

依頼者 え？私も？

娘 ああ、なるほど。じゃあ、お願いしていいですかね。

男 どうも

娘 すぐわかると思うんで。

男 はい。じゃあ、

女、カバンを椅子におく。

依頼者 あ、えーつと

孫 あ、わたしじゃあちよつと部屋に。

依頼者 あ、ごめんね

孫 いえ

男 じゃあ、行きましょう

といい、男、依頼者、女、玄関から外に出る。

孫と娘、二人、目を合わせた後、ぎこちなく目をそらす。
娘、奥の部屋にもどる。
孫、自分の部屋にもどる。

誰もいなくなる 間

老婆、ゆっくり現れる。

挙動不審にあたりを見渡した後、

すばやく、近くの棚をあさる。

中ものを乱雑に取り出す。

その時、玄関から男が入り、老婆を見て、その後すぐに逃げる

老婆、奥からせんべいの入った袋を持ってき、椅子に座る。

そして勢いよく食べ出す。

しばらくして食べるのをやめ、老婆、不気味にニヤリと笑う

そしてまた食べ出す

玄関の方から、男と依頼者の声がある。

男 いや、ちよつと一回来てくださいよ

依頼者 どうしたんですか

老婆、声に気づいて、せんべいを持って逃げ出す。

男 あれ、いない

依頼者 どうしたんだろうこれ

男 おばあさんですよ、さっきそこで何か漁ってたんです。

依頼者 おばあさんが？なんで？

男 いや、わかんないですけど

依頼者 盗みつてことはないですよ

男 盗み？おばあさんが？自分の家のもの自分で盗むことはないでしょう

依頼者 まあ、そうですね

男 あ、もしかして、何か隠してたんじゃないですか？

依頼者 なにか？

男 凶器とか

依頼者 凶器

男 ええ、誰か気に入らない人を殺した後、その血がついたままの凶器をここに入れて
たんじゃないですか？

依頼者 ええ、そんな

男 あ、わかんないな、もしかしたら、死体そのものが入ってたりして
依頼者 いや、そんなことはないでしょう、血ついてないし

女戻って来て

女 あ、すみません。おかげさまでなんとかかなりそうです。

依頼者 あ、よかったです。

女 あ、これお札なんですけど、あり合わせのもので申し訳ないですが…

依頼者 えー！そんなあ

男 なんです？それ

女 お饅頭です

男 いいんですか、それ？

女 ええ、どうせ、私一人で食べ切れませんから。

依頼者 まあ、そんなにあつたら確かに

男 本当にすみません、あ、いただきます

女 いえいえ、こちらこそ助かりました

男 あ、一緒にどうですか？

女 あー、私もう行かなきゃ

依頼者 あー

男 そうでしたね。あ、見送ります。

女 え、そんなそんなか

男 いや、そこ難しいでしょ、車だすの

女 あー、まあ確かに

依頼者 そうですね、手伝います

女 すみません

と、いい、女、男、依頼者玄関から去る

しばらくして人形が出てくる

ゆっくり歩いてくる

と、女、依頼者、男、戻ってきて、人形慌てて倒れているふり。

女、椅子に忘れていたカバンを取る

女 すみません

依頼者 いえいえ

女、依頼者、男、再び玄関から出ようとする。
依頼者のみ、倒れている人形を見つける

依頼者 え、え、

男 どうしました？

依頼者 あ、いや

といい、依頼者・男、外に出る。

人形のみ倒れている状態。

人形が辺りを見渡し、起き上がろうとする。

起き上がった時、ちょうど、老婆が入って来る。

目が合う。

人形・老婆、驚いて一度、別べつの部屋に引込む。

老婆、もう一度顔を出す。

置いてある饅頭に近づき、また勢いよく食べ出す。

そこに孫が現れる。

孫 あ

老婆 あ

孫 またやってるの？

老婆 いわないでくれ

孫 言わないけど

老婆 食べる？

孫 いらない

老婆 …

孫 ほんと、おばあちゃん、おばあちゃんなのに食欲ありすぎじゃない？まあ、健康な
のかな。

老婆 …

孫 警察、またきてたよ。

老婆 うん

孫 あれ、おばあちゃんでしょ？

老婆 え？

孫 あ、いや、あれ

孫、散らかった棚を指さす。

老婆 あ、ごめん

と、立ち上がるうとする

孫 あ、いいよ、わたしやるから

孫、棚を片付ける

老婆 ごめん

孫 私は信じてるからね。

老婆 …

奥から、男と依頼者の声。

男 ああ、でもこんな山道に何の用だったんだらう。

依頼者 むこうに行くって言ってなかった？

男 なにもないけどなあ、むこう

老婆、それに気づいて、逃げ出す。

男 あ

依頼者 ごめんね、話の途中で。

孫 ああ、いえ、ぜんぜん。

男 あ、どうぞ

孫 すみません

と、いい孫、座る。

依頼者 あれ、これ…

男 どうしました？

依頼者 あー、いや、なんかやけに減ってるなって。

依頼者、まんじゅうの袋を手にする

男 いや、なんかへりすぎじゃないですか？

男・依頼者、孫を見る。

孫 わたしじゃないですよ

男 じゃあ、誰だろう

依頼者 誰ですかね。

男 いや、減ってますよね？

依頼者 減ってると思いますよ。

孫 気のせいじゃないですか？

男 いやー、これは減ってると思うけどな

孫 いや、なんか、部屋がこんな空気だから、そう思うだけで、ほら廃墟とか行ったら木を幽霊と見間違えたり、物が動いたように見えたりするでしょ。それと一緒に勘違いですよ。

間

孫 ね？

依頼者 まあ、そうかもね

男 そうですね

依頼者 いや、絶対減ってますって。

孫 いやいや、そんな

男 ちよつと、もう、あなたずっとそんなことばかり言ってますよ

依頼者 いや、だってあなたも思うでしょ。減ってるって。

男 いや、でも気のせいでしょ。そんな

依頼者 気のせいじゃ…やっぱ、このお店おかしいです。だって、人形が動くんですよ。

男 動いてないじゃん。

依頼者 ここらへんのじゃなくて、大きいやつ。電気はちかちかするし、ものは減るし、散らばるし。

男 いや、散らばったのはおあばあさんが

孫 いや、それは

依頼者 そのおばあさんもおかしいでしょ。なんで何も喋らないの。なんで、包丁持っ
てうろろしてるの？絶対おかしいですって。

男 もう、お孫さんがいるんだから、そんなこと

孫 あ、私は…

依頼者 いや、だって。あれ、今誰かいなかった？（この話題の間、人形が、ウロウロ
していて、窓からシルエットで見えたり、のぞいたりしている。あるいは、客席がある
いたりしている。）

孫 え？

男 誰か？だれかって

依頼者 人形ですよ。絶対あの人形。

孫 どういうことですか？

男 だから、そんなことないですって。人形は動くわけないじゃないですか。

依頼者 そんなことわかってますよ。ええ、今まで、私もそう思ってたよ、人形は動かないって。でも、動いてるんですもん。瞬きもするし、コーヒー飲むし。

男 なに、馬鹿なこと言ってるんですか。人形は、人間が動かさないと動かないの。ほら、こうやって。

男、腹話術の人形を動かす。

依頼者 いや、そうですけど。あ、ほら、また。そこ。そこに。(窓を指差す。)

男 何もないじゃない

依頼者 いや、いましたって。ねえ

孫 え、わたしもわからないんですけど

黒い影がでてる。

男 あれ、今。いたような

孫 いましたね

ゆっくり、窓に近づく3人

依頼者 開けましょう…

誰も開けようとしな

男 開けよう。

依頼者 開けてくださいよ

男 え、なんで僕。

依頼者 いや、だって。

男 嫌だよ、僕、そういうの苦手だから。

依頼者 さっき大丈夫って言ってたじゃない。

男 言っていないよ、さっきっていつ？

依頼者 さっき

二人、にらめあつた後、孫を見る。

孫 え、私も嫌ですよ。

依頼者 えー、もうしようがない。私がやる。

依頼者、そつと手を伸ばす。

電気がチカチカする。

そつと窓を開けると誰もいない。

依頼者 え？

男 なにもいないじゃん

孫 なんだ

男 もう、だから言ったじゃないですか。

依頼者 いやいや、自分も見たって言ってたでしょ。

男 何もいないって言ってたじゃん。

扉叩く音。

男 いや、いる。

依頼者 でしょ。

扉、開いて警察が入ってくる。

依頼者 あ

警察 うん？

男 なんだあんたかよ

孫 びつくりさせないでくださいよ。

警察 え、なんですか？

男 あー、もう、あんただったのか、紛らわしいなあ

孫、奥の部屋に行く

警察 え、なにがですか？

依頼者 どうかしたんですか？

警察 いや、ちよつと

依頼者 さっきの用事ですよ？

警察 いや、まあ

依頼者 ねえ、なにしたんですか？

警察 え？

依頼者 あのおばあさんでしょ、なにしたんですか？

警察 いや、これは…

警察、周囲を確認した後、小声で、

警察 実は、二週間ほど前、ここで殺人があったんです。

男 殺人！

依頼者 やっぱり

警察 亡くなったのはこの旦那でした。

男 え！

依頼者 え、それって

男 あの真ん中の

警察 真ん中？

依頼者 あーいや、あのおばあさんの娘の

警察 ええ。ここからちよつと離れた、あ、その窓から見える倉庫で殺されていました。包丁で。

男 包丁！

依頼者 包丁？さっきの？

警察 何！？凶器があるんですか？

依頼者 あ、いえごめんなさい。そうかはわかりませんが

警察 ああ、それで、あの老婆を疑っているんですけど、

依頼者 でも会わせてくれない

警察 そうなんですよ

男 逮捕状は？

警察 まだです。証拠が十分じゃなくて

男 あー、なるほど

警察 目撃証言がありました。事件の起きた時間、背の低い人が、倉庫付近をうろろろしていたと

男 あー、でもそれだとあのおばあさんだけじゃなくても

警察 いや、他の人にはアリバイがあつてですね

依頼者 アリバイ…

警察 あ、これ言っているのかな…

依頼者 いいましようよ

警察 あー、はいその娘さんは、そのときその孫の子の学校の保護者会に行っていました。

依頼者 PTA

警察 当然、お孫さんも学校にいる時間でしたので

男 なるほど。だからおばあさんだけアリバイがないと

警察 ええ

男 あ、その倉庫で。なるほど

警察 どうかしましたか？

男 いや、だからさつき。捜査なさってたんですね。

警察 捜査…？

男 ええ、さつきほら、そこで。

依頼者 こんな雨なのに、大変ですね。あ、座ります？座りますって言っても私のじゃないですけど。

警察 あ、どうも。あ、お二人は、ここのお客さん…？

依頼者 ええ。

男 はい。

警察 ここにはよくくるんですか？

依頼者 私は初めて…

男 あ、僕結構きますよ、人形、よく壊しちゃうんで。

警察 あ、人形。

男 えー、人形の店なので。

警察 ええ、いや、それにしても不気味ですね。

依頼者 うーん、でもよくみたら懐かしい人形とかもあるんですね、昔、親からもらって、知らない間に破れて捨てちゃったものとか。

警察 あー、まあ子供の時は私も

男 え、人形？

警察 ええ、しましたよ。着せ替え人形。まあ、男のくせにつてよく言われて、それでやめましたけど。でも、大人になっても、懐かしいものですよ。

男 あー、まあそうですね

依頼者 それってやっぱりおかしいですよ。

警察 え？

依頼者 あ、いや男だとか女だとか別に関係ないじゃないですか、ほら、男の子の着せ替え人形もあるわけですし、

警察 ええ、そうですね、まあ

男 まあしかたないですよ、そういうものは、みんな言葉ではわかってるんですよ、別に、男だから人形遊びしちゃいけないなんてみんな思ってるわけじゃないですよ。た

だ、ほら、小学生のときランドセルって、だいたい男の子が黒で女の子が赤だったじゃない？あれもさ、別に、そうって決まってるわけじゃないでしょ。でも、親は、その子がいじめられないようにとかで、その色にするんじゃないですか。そういうことですよ、そうやって男は黒、女は赤。男は外で野球、女は中で人形、みたいな

警察 そうですね、でも、まあ、もう今はもう結構変わっていますから。

依頼者 そうですか？

警察 ほら、ランドセルももういろんな色があるし、

依頼者 私のこと、赤です。

警察 あー、まあそれは…

男 まあ、少しづつね、少しづつ変わっていくのかも

依頼者 あー、でもすごいですね、人形遊び

警察 まあ、ちよつと恥ずかしいですね、やっぱり。あ、もう流石に今はやってないですよ

依頼者 そうですよ

警察 あー、でもそれにしても、いろいろあるなあ、

といい、警察立ち上がり、人形を見る。

依頼者、男もそれにつられて、人形を触ったりしている。

依頼者 こんだけあると、不気味に見えるけど、実は一つ一つは可愛いんですよ。

男 まあ、本当に不気味なものもあるけど。

依頼者 ええ、まあそれは。

娘、奥の部屋から出てくる

娘 またきたんですか？

警察 あ、ええ、すみません何度も

娘 さつききたばかりじゃないですか

警察 ええ、でも。どう考えても、そうとしか考えられないんですよ。

娘 だから、証拠は

警察 目撃証言があります。

娘 でも、それははっきりみたわけじゃないでしょ

警察 ええ、車の中から、ぼんやりとそう見えただけだと。

娘 だったら

警察 でもこの倉庫で、この家に住む人が殺されているんですよ。当然、まずは、ここに住む人を疑うでしょ。

娘 まあ、そうかもしれないけど

警察 庇つても無駄ですよ。

娘 そんなんじゃないやありません！母は本当に！

警察 じゃあ会わせなさい！

娘 嫌です！

男 まあまあまあ、そんなにこうカツカしないで。おちついて話しましょう。ねえ、そうそう、笑顔で。うん、スマイルだよ。スマイル。

娘、警察、不敵な笑み。

男（腹話術） いい笑顔！いい笑顔！

警察・娘 うるさい！

男（腹話術・小さい声で） すみません

依頼者 まあ、でも本当に落ち着いて。

娘 すみません、こんなところで。店の中なんですから、やめてください、迷惑です。

警察 それならば、中に入れてくださいよ。

娘 いやです。

警察 ねえ、あなたたちも、怪しいと思うでしょ、こんなに隠されたら。絶対かばつてるとしか思えないでしょ？

依頼者 え、わたしたち？

男 あー、まあ、確かに、そんな気もしなくはないかな

依頼者 ちよつとだけですよ、ちよつと

娘 違います。母はそんなことしません。確かに顔は怖いけど。

依頼者・男（小声で） たしかに

警察 ええ、それに、あのおばあさんと、あなたの旦那さんの仲が悪かったという情報もあります。毎晩この家で、怒鳴り声が聞こえるとも。

娘 …

警察 いいですか？

娘 だめよ

警察 いいですか？

娘 だめです

警察 いいですよね！

娘 …

孫 いいわ

娘 え？

孫 いいわよ、おばあちゃんと話しても。

娘 あんた何言ってるの
警察 そうですか、では。
娘 ちよつと待ちなさい。

警察、聞いてないかのように、奥の部屋へ行く。

娘 あんた、なんてこと言うの

孫 いいじゃない、わたしもおばあちゃんはしてないと思うわ。だから、話させてもいいんじゃない？

娘 まあ、そうだけど。

孫 怖いんじゃないの？

依頼者 怖い？

男 あ、おばあちゃんが疑われてつかまるのが？

依頼者 あー、まあそうですよね

孫 ねえ、怖いんですよ

娘 なによ、なんなのよ

孫 自分が捕まるのが怖いんですよ。

娘 は？

依頼者 え？

男 え？

孫 わたし、お母さんが殺したと思ってるよ、お父さんのこと。

娘 何言ってるのよあんた。

孫 私知ってるよ、あの時、お母さんが本当は家にいたの。

娘 あの時は保護者会が

孫 聞いたもん、友達のお母さんから、途中で帰ったって。

娘 :

孫 こっそり帰って殺したんですよ。あの日、お父さん、休みだったから。

娘 ちがうってそれは。

孫 お母さん、ずっとお父さんとけんかしてたもんね。

娘 ちがう、だから

孫 毎晩毎晩、私の部屋の隣から、アホとか役立たずとかぶち殺すぞとか。だから、お母さんもあんたなんて死んじゃえって。本当に殺しちゃったんだね。しょうがないと思うよ。ずっとだもんね。私が生まれてから、いや、もっと前から？お母さんが一人で、泣いてたの見たことあるよ。でも、同情なんかしないよ、私お母さんのこと嫌いだから。あ、お父さんも嫌いだよ、うるさいし厳しいし。でも、お父さん、私には手ださないから。

依頼者・男、こっそり去ろうとする。

孫 待つて。ねえ、聞いてよ。お母さん、お父さんに細かく家事言いつけられて、無断で外出するなって言われて、それでイライラしてたんだろうね、イライラして、ムカついて、どうしようも亡くなった時には、私のことぶってたよね。何度も何度も。私、何も言えないから。何も誰にも言わなかったから。何度も何度も

と言いながら、少女近くの人形を殴り続ける。

娘 ごめん、謝るから。

孫 謝るんだったら警察に謝ってよ。ねえ、ねえ！で、早く死刑になってよ、無期懲役でもいい、早く私の前から消えて欲しい、自由にさせて欲しい。

娘 でも、私は殺してないから

孫 何言ってるの、ねえ、あんたもいつてたでしょ、お父さんに。私は言われたことしかできない操つり人形なんかじゃないって！

娘：

依頼者 人形：

孫 行きましょ？ ごめんなさい、もうちょっと待つててくださいね。

依頼者 あ、え、でも：

娘・孫、奥の部屋へ行く。

沈黙

男 あ、僕も、もうそろそろ帰ろうかな。

依頼者 雨、降ってるわよ

男 え、だつて。

依頼者 なんかすごいところに来ちゃいましたね。

男 ええ。

依頼者 やっぱりわたし、なんか絶対あるとおもってたんです。この家。

男 うん。

依頼者 信じてくれないから。

男 結局、みんな人形じゃなかったってことだね。

依頼者 え？

男 いや、ほら女の子もあんなに感情むき出しにして、まあ、当然だけど。あの奥さんも、もし、もしだよ、本当に人を殺してたんなら、人間らしい感情があるってことじゃ

ないか。

依頼者 人間らしいって、そんな

男 いや、まあ人殺しはあれだけど、でも人間を殺すのは人間だけじゃない？

依頼者 ええ、まあ

男 あ、雨、やんだかなあ

依頼者 え、帰らないでくださいよ

男 え、だって

依頼者 だってってだって

男 あ、やんでる。帰りますね。

依頼者 ちよっとー

男 ごめんね、僕、人間なんで、自分の意思で行動するんで。ごめんなさい

男（腹話術）ごめんね、ごめんね

といい、走り去る。

一人残る依頼者。

依頼者 人でなし。

間

依頼者、不気味そうにあたりを見渡す。

急に、オルゴールが鳴り出す。

依頼者、驚き立ち上がる。

オルゴールを止めようと探すも、見つからない。

奇妙な人形をたくさん、どけてゆく。

依頼者、見つけられていないと、

奥の部屋の方から、物音がする。

依頼者 だれ？

間

そこに人間型の人形が現れる。ふつうに人間の姿で依頼者に近づいてくる。

依頼者 え？やっぱり

人形急に笑い出す。

人形 ふふふ

依頼者 なに？あなたやっぱり動くの？

人形 ふふふ

依頼者 あなた、どうして私のいるときにしか動かないの？

人形 あなただけだったから。

依頼者 え？

人形、近づいてくる。

人形 あなたは、わかってくれた。わたしにはなしかけてくれた。

依頼者 え？どうということ？

人形 あなたが入った時、話しかけてくれた。

依頼者 ちがうよ、それは…

人形、依頼者の手を握る。

依頼者 やめてよ、あなた人形でしょ

人形 わたし、人間よ

依頼者 何言ってるの？

人形 わたし、人間

依頼者 いや、確かにそっくりだけど、でも、人形なんでしょ？電池もある。

人形 わたし、あなたが好きよ

依頼者 え？

人形 他の人、みんな私が人間じゃないって言うもの。こんなに人間みたいなのに

依頼者 だって、人形だから

人形 わたし、恋もするしおしゃれもするし、自分の意思でうごけるもの、人間だわ。人を恨んだりもするわ、憎くて憎くてそれでその人のこと…

依頼者 え？ それどうということ

人形、ニヤリ

依頼者 …離して

人形 いやだ

依頼者 人形のくせに

人形 じゃあ何が人間？笑うのが人間なの？怒るのが人間？瞬きするのが？ご飯食べ

るのが？私、喋れるようになったよ、動けるようになった。腕も足も曲がる。自由にステップだって踏めるし、音楽に乗りながら、歌だって歌える。誰も聞いてくれないけど。寂しいって感情もあるよ。ずっと寂しかった。だから、いろんな人の話聞いて勉強してたの。本だって読めるよ。日本語でも、英語でも、フランス語だってわかる。いっぱい知識があるもの、考えたりもするよ。政治のこととか、平和のこととか。遠い国の争いの話を聞きながら思うの。この遠く離れた安全な場所で、じっとしずかに座っていていいのかって。みんな知っていることなのに、だれも声をあげない。自分から動こうとしない。変わらなきゃ、変えなきゃって思っておきながら、現状に満足して一歩も踏み出そうとしない。その足を動かさうとだってしない。オシヤレだってするよ。いつもはもつと可愛い服着てるんだからね。こんなボロいのじゃなくて。自分できができることだってできる。どこかのお人形さんじゃないんだから。ねえどう？人間よりもすごい？人間よりも人間してる？自由に動けるくせに自分で動かない人間よりも私はよっぽど人間だわ。

依頼者 …

人形 ねえ、おどろう？

依頼者 え？

人形 私、踊るよ。人間だから。

依頼者 …

人形 あなたは踊らないの？

人形、オルゴールのリズムに合わせて、踊り出す。

軽やかな舞。

依頼者、ひきつりながらそれを見ている。(その姿はまるで人形)

少しずつ暗転

完